

語用論・社会言語学研究の現状と展望

李吉鎔*

〈 Abstract 〉

Current trends and prospects of studies on Japanese pragmatics and sociolinguistics

This paper reviews researches of pragmatics/sociolinguistics through analysis of 122 research articles published in 2015 and 2016 in Korea. Classification of keywords of these articles reveals that 'Contrastive discourse analysis between Korean and Japanese' is a characteristic of researches on pragmatics/sociolinguistics in Korea. It further shows a tendency for many keywords to be related to the field of (i) communicational functions between Korean and Japanese, (ii) speech act strategies in a first-meeting contact situation, and (iii) second language acquisition.

In the area of Contrastive Discourse Analysis, many studies regard the social practicality as their research significance, for their findings can help resolve issues of conflict or misunderstandings in communication. The trend has been situation-descriptive contrastive research that is motivated by 'what and how speakers utter'. While a large portion of these researches are devoted to exploring linguistic strategies on the basis of the Politeness Theory, only few researches take an approach of the Variation Theory in terms of how a speaker choose different linguistic forms in diverse situations. Further, there are some studies authored by Japanese researchers who live in Korea which investigate the differences between Korean and Japanese in the culture of apology by addressing common trends that are often unnoticed by Korean people. These studies are innovative in the sense that they constitute cultural research without much influence from linguistic theories.

Research of Second Language Acquisition (SLA) has developed from acquisition to maintenance and attrition, based on a fundamental goal to discover rules in the interlanguage of learners. However, research on acquisition of sociolinguistic competence is yet to be explored. Its research is an urgent matter for the SLA literature since it is an important competence for Japanese learners to establish and maintain interpersonal networks using Japanese.

A veteran researcher once said "Contrastive research of empirical linguistic behaviour between Korean and Japanese is still lacking both in terms of the qualitative and quantitative points of view". This seems still to be valid even though many detailed aspects of linguistic behaviour in Korean and Japanese people have been made clear through the efforts of numerous researchers. Further, while there are many researches that aim to observe and describe particular linguistic behaviours, little attention has been paid to ground-analysis-type research as to how and why those languages behave in such a way.

Field: Pragmatics, Sociolinguistics

Keywords: Contrastive Study Between Korean and Japanese, Contact situation, Speech Act,
Discourse analysis, Second Language Acquisition, Function, Strategy

* 中央大学校 教授

1. はじめに

2017年、年明け早々のことである。小学生3年の9歳の子供と一緒に出かけようとした時、60歳ほどのマンションの警備員さんに、「사장님, 오늘도 춥네요」とあいさつされた。このあいさつ文は、人間の脳の情報処理のニューラルネットワーク(neural network、神経網)技術を応用したことで精度が飛躍的に向上したと、最近話題のGoogle翻訳にかけると、「社長、今日も寒いですね。」と出てくる。しばらくしてから子どもに、あのあいさつはどういう意味かわかるか、と聞いてみると、字義通りに「気温が低くて寒い、ということ伝えてる」という返事が来た。なるほどその通りであるが、私には少し違う含みが入っているように感じられた。10日ほど前に、新年のあいさつ代わりにと、少しばかりの心づけを渡したのであるが、その日も大変寒い日だったのである。

上のあいさつ文において、社長と呼ばれるのは大して偉い人に限ったことではないからおいといて、오늘(今日)と춥(寒い)は語彙的意味、도(も)は文法的な意味を持つ。네(ね)は談話情報に関り、요(です)は社会言語的意味を持つものである。そして「오늘도 춥네요(今日も寒いですね)」が文字通りの意味(literal meaning)だけでなく、グライスの協調の原理(cooperative principle)に従い、言外の意味を伝えるものとして解釈されれば、その場合は読者の皆さんが想像するような、語用論的意味になる。本稿では、語用論研究・社会言語学研究について展望を行うが、そこには語用論的な意味、社会言語的な意味、談話情報に関わる意味を分析した研究が射程に入ってくる。

ここで、語用論と社会言語学の接点について簡略にまとめておこう。

まず、語用論について。語用論の実質的な発展は第2次世界大戦以降に見られるが、それは時代の要請でもあった。大戦以降、国境を越えて人的資本の移動が活発になり、人々の間での意志疎通の重要性、外国との交流・協力関係の拡大など、現実社会の日常的な側面に目が向けられ、その重要性が広く認識されてきた。言語に対する意識においても、日々の日常生活で使われていることば、コミュニケーションの手段としての話しことばに注意が向けられてきた。

次に、1960年代半ばまでは、言語能力とは語、音韻、文法生成などの言語構造規則に関わる知識として狭義に定義されてきたが、Hymes(1972)は言語能力の意味をより広義に捉え、いつ、誰に、どのような状況で、何を伝えるかを把握し、その目的や場面に応じた適切な言語使用をする能力も含むコミュニケーション能力(communicative competence)を提唱した。Canale & Swain(1980)と Canale (1983)はハイムズのコミュニケーション能力をさらに細分化し、文法能力(grammatical competence)、社会言語能力(sociolinguistic competence)、方略能力(strategic competence)、および談話能力(discourse competence)に分けた。そのうち、社会言語能力とは、ことばの持つ社会文化的意味や機能を理解し、状況や聞き手に合わせた適切な話し方ができる能力のことである。この社会言語能力により、話し手は聞き手に対して、丁寧さや礼儀正しさを表すことができ、円滑な人間関係を築くことができるのである。

こうして語用論的能力(pragmatic competence)と社会言語能力が接点を持つことになるが、両方の能力が備わっているからこそ、次の2人の学生の会話を一見ただけで、どちらが男性の発話であるか、どちらが先輩か、そしてBはAの発話の意図をどのように考えているのか、容易に気づくはずである。

A: もう12時だね。遅くなったから送ってやるよ。

B: いや、暗いから一人で帰ります。

語用論と社会言語学の2つの分野は、互いに関連する話題を扱うことも多く、たとえば呼称(address term)や敬語、スピーチレベルの選択をはじめとするポライトネス、発話行為といった問題は、双方の関

心事である。そして我々が第2言語(または外国語)として日本語を学び使用すること、すなわち学習者言語に焦点を当てれば、学習者が習得すべき内容は、ある言語共同体の中で社会生活を営むための言語知識の総体としてのコミュニケーション能力に他ならない。学習者言語研究でも、1980年代に入って学習者の語用論的知識の研究が進展を見せた。この分野は中間言語語用論(interlanguage pragmatics)と呼ばれ、第2言語の学習者が目標言語で「謝罪」「依頼」「断り」などの発話行為(speech act)を行う際の語用論的能力に関して、発話内効力(illocutionary force)、ポライトネス(politeness)、適切さ(appropriateness)などの側面に焦点をあてて研究が行われてきた。

2. 語用論研究・社会言語学研究の現況

〈表1〉キーワードの分布

本稿では語用論・社会言語学の分野において2015-16年度に韓国で発表された122本の研究論文を対象とする。何本かの共著を含めて73人の著者のうち、姓名(氏名)から判断して、42人は韓国在住の韓国人研究者であり、論文数は95本に上る。また韓国在住の日本人研究者は19人ほどであり(論文数は15本)、日本在住の韓国人研究者が9人ほどである(論文数は9本)。日本在住の日本人によって行われた研究は井上史雄(2015)などわずか3本のみと極めて少なく、そのうちの1本は日本在住の韓国人研究者・中国人研究者との共同研究である(金庚芬・関崎博紀・趙海城2016)。

こうして全体の約82%の論文が韓国人の研究者によるものであり、この点は「対照研究」という研究の形に大きく影響を及ぼすことになる¹⁾。日本人のコミュニケーション・スタイル(言語行動)を浮き彫りにするのに、韓国人のそれとの対照を試みる方法をとったものである。この視点は、日本人とは異なった規範を持つ日本語学習者は日本語のさまざまなコミュニケーション・スタイルとその運用をどのように身につけるのか、などという広がりを持つ。

具体的に見ていこう。122本の論文から664個のキーワードを取り出し、類似するものを上位カテゴリにまとめ、〈表1〉に示す。〈表1〉からは、〈韓国語と日本語との対照談話分析〉という、韓国における語用論研究・社会言語学研究の特徴が浮き彫りになる。そして、(1)韓・日のコミュニケーション(日常会話)における機能、(2)初対面の接触場面における発話行為の戦略、(3)第2言語習得、などの分野におけ

実数	代表項目
30	談話
20	韓国語
19	日本語
17	対照
15	韓日、発話
14	コミュニケーション
13	日常会話
11	言語行動、発話行為(依頼・断り・謝罪・誘い)
9	機能、敬語
7	初対面、接触場面、戦略
6	ポライトネス、親疎関係、第2言語、習得、地域方言、呼称、終助詞
5	ノダ、文末表現、話題、連鎖構造、社会言語学、性差、女性、相関、評価

1) 122本の論文のうち、展望論文が4本あり、代表的なものに井上史雄(2015)と홍민표(洪珉杓2016)がある。井上史雄「敬語の成人後採用と追跡調査データ」(『日本語学研究』44、韓国日本語学会、2015)は、国立国語研究所が実施した岡崎調査(1958; 1983; 2010)におけるパネル調査(同一人物追跡調査)データを紹介し、パネル調査における文の長さを支配する原理として丁寧さを挙げている。홍민표「일본 사회언어학의 연구동향」【洪珉杓、日本社会言語学の研究動向】(『社会言語学』24(1)、韓国社会言語学会、2016)は、日本での社会言語学の登場について紹介しつつ、最近の日本社会言語学の研究動向をマクロに概観したもの。両方とも研究分野の流れをつかむのに役立ち、十分に一読の価値がある。

るキーワードが目立つ。具体的な言語項目としては、呼称や敬語、ノダ形式・終助詞などの文末表現、会話の話題導入や連鎖構造などがある。またポライトネス理論に依拠し、親疎関係の側面や性差、地域差を考慮し、項目間の相関や評価について分析・考察する、という方法論が見えてくる。

次節以降では、この3つの分野における研究論文を中心に据えながら、言語と社会の関係を探る他の研究分野の動向についても展望を行う。なお、本文の記述の簡易さを求めて、個別の研究において相互に類似する概念は一つに統一する。たとえば韓日・日韓は、「韓日」と統一し、日本語母語話者は「日本人」、韓国語を母語とする学習者などは「韓国人日本語学習者」と記することにする。そしてハングルで書かれた論文は日本語訳を併記し【】に括弧する。

3. 研究の展開

それでは、韓国における語用論研究・社会言語学研究の3つの主流分野の具体的な研究を紹介していく²⁾。

3.1 韓・日のコミュニケーション(日常会話)における機能

韓・日のコミュニケーションにおける機能という分野においては、自然談話収録調査またはアンケート調査により、「ある内容を、どのように言うか」に着眼した、実態記述型の対照研究が行われてきたとまとめられよう。

鄭賢兇「負担度の差による謝罪行動の特徴に関する韓日対照研究 - ポライトネス理論の観点から -」(『日語日文学研究』95(1)、2015)は、相手に精神的被害を与えることについての謝罪場面を設定し、同性同士の親しい友人間のロールプレイ型会話データを分析したものである。男性の韓国人の32会話(軽負担度16会話、重負担度16会話；一人の協力者が負担度の異なる2会話を遂行する)と女性の韓国人の32会話、そして日本人においても男女それぞれ32会話の64会話を収録し、「負担度の差、男女差、韓日間の違い」の3点について考察した大著である(博士論文の一部をまとめたもの)。負担度の重い謝罪場面では、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先されること、女性は男性に比べ相手のフェイスを配慮する言語行動を行おうとする傾向があること、など興味深い結果を一般的原理(politeness)の一つとして提示している。정영미「부담도가 낮은 청유 의 담화 구조에 관한 한일 대조연구 - 남자 대학생의 대화를 대상으로 -」【鄭榮美、負担度の低い誘いの談話構造に関する韓日対照研究 - 男子大学生の会話を対象に -】(『日語日文学研究』96(1)、2016)では韓日の男子大学生が負担に思わない事柄を友人に誘う会話を収録し、発話行為における項目間の関係を分析した。日本語では先行発話連鎖で被誘い手が内容に否定的な事を言及した場合は疑問形のみを使用し、被誘い手のネガティブ・フェイスに配慮をするという特徴を明らかにした。項目間の関係性の分析という目の付けどころがいい。

日本人と韓国人日本語学習者との接触場面における研究(이은미「한일 접촉 장면에 나타난 『なんか』

2) 学会から出される学術誌のうち、参照論文数の多いものは学会名を省略する。『日本語学研究』は韓国日本語学会、『日語日文学研究』は韓国日語日文学会、『日本言語文化』は韓国日本言語文化学会、『日本語教育研究』は韓国日語教育学会から出される学術誌である。なお、大学付属の日本研究所などから出される学術誌の場合は、大学名までを記する。

의 커뮤니케이션 기능」【李恩美、韓日の接触場面における「なんか」のコミュニケーション機能】『日本語学研究』46、2015)は、具体的な言語表現に注目したものである。「なんか」は談話の中で、発話内容の断定を避け、躊躇の心的態度を示すことで、発話内容を和らげる機能をする。

これらはロールプレイ型のコントロールされた会話(いわゆる自然談話)を用いた研究であるが、韓国と日本のテレビドラマのシナリオを用いて依頼・勧誘に対する断わりと受諾を分析した論考もある。元智恩「日韓両言語における断わりと受諾の一研究」(『日本文化研究』60、東アジア日本学会、2016)によれば、日本語では韓国語に比べて間接的に受諾する傾向が強い、という韓日の相違点が見られるという。元智恩氏の研究が有意義なのは、発話行為の連鎖として捉えている点である。生越直樹(2012)が指摘するように、一連の言語行動が有機的に結びついているという点に注目した、相互作用としての言語行動研究の一つである。

さらに、設問紙調査による研究もあり、1,123人の韓国人と日本人を対象に「暇なとき、家に遊びに来てね」などの9つの間接的な発話文の使用頻度を調査した홍민표「간접발화의 사용실태에 대한 한일대조연구」【洪珉杓、間接発話の使用実態についての韓日対照研究】(『日語日文学』66、大韓日語日文学会、2015)は、例外なく韓国人のほうが使用頻度が高かったと主張している。多くの研究で日本人の方が間接的で婉曲な表現を好むとされてきたが(本文中の峯崎知子2015、元智恩2016なども参照)、この研究では反対の結果が得られ、興味深い。既存の研究に仮説設定や調査方法についての再考を促し、更なる調査報告の必要性に訴えるものになる。

以上の研究では、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論(politeness theory)を導入したり、多かれ少なかれそれに影響を受けて、フェイス・リスクの度合いによりストラテジーが選択されるという観点からの研究である。以下では、自然談話収録またはアンケート調査による実態記述型の対照研究という基本的なスタンスから派生型研究、または応用的な研究について見ていく。

まず、研究の観点を転換したものから。そもそも話し手が発話行為を行わないことによって意図を伝える無言行動についての研究があった。盧姪鉉「韓国人の無言行動の意味・機能に関する社会言語学的研究 - 類似した状況の下で現れる日本人の言語・非言語的行動との対照 -」(『日本言語文化』33、2015)は、韓日のリメイクドラマや映画から収集した映像を分析し、韓国人の無言行動が実用機能を持つ場面では、日本人も約30%前後が無言行動を取るが、韓国人の無言行動が社交機能を持つ場面では、日本人は無言行動を取っておらず、そのほとんどがことばを使用しているという知見を得ている。韓国人の無言行動のみを調べたという制限付きではあるが、韓国人の無言行動の意味・機能に関する研究として一読に値する。今後の研究の進展が大いに期待される。

張允娥「同性間・異性間の会話における〈理解〉と〈同意・共感〉 - ポライトネスの観点からみる日韓差と男女差 -」(『日本語学研究』45、2015)では、韓国と日本においての親しい間柄の同性・異性間の自由会話を用いて分析した。相手のポジティブ・フェイスに配慮したポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(PPS)の中で、共通基盤を主張する「理解」と「同意・共感」という具体的なストラテジーに注目しミクロなレベルで議論を展開している。ところで韓国では依頼をすること自体がPPSになることがある。この研究は、友人同士の会話そのものが親密な人間関係を維持あるいは構築するためのPPSであるという理解から議論を展開している。ミクロな分析ではあるが、一歩踏み込んだ形でポライトネスの原理を考えている。

次に、研究方法を改良したもの。話しことばの文字化資料のみでなく、映像資料を用いた分析も行われるようになった。孫榮爽「並列マルチメディア・コーパスと対照言語行動研究 - 指示代名詞「コレ」と「이」

것(yi-geot)'の発話時を例に-) (『日本言語文化』35, 2016)は発話時の映像や音声参照できるようにしたマルチメディア・コーパスを用い、指示代名詞の使用を分析した動的な視点からの研究である。韓国語では発話現場に実在しないものを再現したり臨場感あふれる説明のために用いられやすいという。マルチメディア・コーパスの開発により、非言語行動研究の飛躍的な発展が望まれる。

最近の新たなメディアの発達やコミュニケーションのあり方の変化に伴い、新たなコミュニケーション・スタイルが生成される実態を反映して、Eメール(李善姬「韓国人日本語学習者のEメールにおける依頼行動-日韓両言語話者との比較を通して-」『日本語学』69、韓国日本語学会、2016)、김광태・김준숙・송은미「일본어 답신메일의 답화전략과 언어표현행위」【金光泰・金俊淑・宋殷美、日本語の返信メールの談話ストラテジーと言語表現行為】『日語日文学研究』95(1)、2015)、김보애「흥쇼핑 방송의 한일 커뮤니케이션 연구-쇼핑호스트를 둘러싼 담화공간을 중심으로-」【金宝愛、テレビショッピング放送の韓日コミュニケーション研究-ショッピングホストをめぐる談話空間を中心に-】(『日本言語文化』31, 2015)などにおいての談話分析の試みがある。そのうち、김보애(金宝愛2015)は、テレビショッピングの進行者の発話に注目した。韓国語より日本語の方が敬語のレベルが高く、文章の構造がしっかりしていることがわかって興味深い。

関連する事象として、近年の研究において、「慰め」、「皮肉」、「取り消し」など、これまでに触れられていない言語行動を取り上げることで、研究のオリジナリティーを確保しようとする動きが見られる。今期も「コンフリクト時の言語行動」と「けなし行動」についての研究があった。佐々絃子「コンフリクト時に使用される日韓のメタ言語表現に関する研究」(『日本語学研究』45, 2015)は、韓国語と日本語のシナリオからメタ言語表現の出現数を比較したもので、コンフリクト時に使用されるメタ言語表現は、日本語に多く現われていたという。言語行動の対照研究の大きな流れを汲んだものである。林始恩「日本語の友人同士の会話におけるけなし行動について-性別による違いに注目して-」(『日本言語文化』36, 2016)では、親しい間柄で、親和的意図で相手の言動を低く評価するけなし行動を性別の違いに注目して調べた。雑談12会話を分析し、異性の友人と話すとき、けなしの頻度が増えることなどを指摘した。そしてこの研究は、임시은「비난의 표현방식-한일화자의 비교-」【林始恩、非難の表現方式-韓日話者の比較-】(『日本研究』65、韓国外国語大学校、2015)において韓国人と日本人との比較研究に発展し、日本人は相手の領域に触れるとき「確認」の形をとるが、韓国人は「指摘」の形をとることを明らかにしている。なお、相手を低く評価するけなしの行動は、ポライトネス理論に即して考えた場合、わざわざ相手のメンツをつぶすことを意味するのか、けなしはするけれどメンツがつぶれるのは避けているのか、その意味合いについてはさらに吟味すべきであろう。

これまで見てきた研究の多くは、研究の意義として、コミュニケーション上の誤解や摩擦の解消に役立てようという社会的な有用性をあげている³⁾。「社会問題に対することばの面での対処」という問題意識から出発したものである。しかし日本において一般にプラス評価を受ける西洋人の陽気なジョークは誤解や摩擦につながりにくいことからわかるように、言語行動の違いは誤解や摩擦の必要条件ではあろうが、充分条件にはならない。少なくとも、言語行動の違いが相互の話者にどのように評価されるかによって誤解の生まれる度合いは異なり得る。ここに「評価に関する研究」が立ち現れる。言語行動に対する「評価」は、言語管理理論(language management theory)や異文化トレーニング(DIE法)などにおいて中核をなすものである。李吉鎔「ポライトネス理論からみた韓・中・日の言語行動の相互評価」

3) この点については、李吉鎔(2011)において異文化間コミュニケーション研究(韓国と日本の対照言語行動研究)の問題のありかとして整理された5つの視点を参照されたい。

(『日本語学研究』46、2015)は韓国人と中国人、そして日本人の言語行動に対する相互評価を分析したものである(936サンプル収集)。分析の結果、相手のフェイスを脅かすリスクの高い「断り行動」では、韓国語や中国語のように、細かく理由を説明することが日本人にも肯定的に評価されることがわかった。

「評価研究」という新たな分野が開発されつつあり、更なる展開が期待される。なお、この研究は韓国・中国・日本の3ヶ国人の言語行動を総合的に捉えたものである。韓日対照を超えて東アジアの視点からの研究が出始めている。他にも金庚芬・関崎博紀・趙海城「日本・韓国・中国の肯定的・否定的評価行動に関する対照研究」(『日本語学研究』50、2016)がある。韓国で217名、中国で209名、日本では202名の大学生にアンケート調査を行い、外国語やスポーツ、家族仲、服装などさまざまな事柄について、どのように評価するかを分析したものである。韓・中・日で個人の持つ能力や才能、結果などは、ほめの対象になりやすく、親友に対する肯定的な場面では、韓国と中国が日本に比べ、積極的にほめるなど、親疎関係の側面からも議論を展開している。ただし、韓日の内部に男女差があるのか、韓日の違いを超えて男女差があるのかについては、今後の研究の深化が望まれる。

最後に、韓国在住の日本人の研究者による文化論的研究に注目すべきものがあつた。ロコミサイトでの接客場面における謝罪(持田祐美子2015)、日本人観光客の不満(伊吹早耶香・大池森・近悠美・中村有里2015)などがそれである。持田祐美子「日本人観光客のロコミから見る日韓謝罪文化の比較 - ミスに対して『謝罪がなかった』事例から -」(『日本言語文化』33、2015)はインターネットのロコミサイトを通じて、日本人が、特に接客場面において謝罪が必要だと感じる場面でそれがなかった事例を調査したものである。謝罪場面において韓国人は、対処の有無が重要事項なのに対し、日本人は反応の有無を重要視し、また速やかな謝罪を求め、言い訳を低く評価することが明らかとなった。「行為が無いこと」を問題点として取り上げている。伊吹早耶香・大池森・近悠美・中村有里「日本人観光客が『謝罪がない』と感じた接触場面における不満の種類と韓国人接客者の対応 - 韓国旅行情報サイトの投稿をもとに -」(『日本語教育研究』33、2015)でも、韓国旅行情報サイト「コネスト」「ソウルナビ」の体験談から、日本人観光客が不満を抱いたにもかかわらず「謝罪がなく、反応がない」と感じた事例を分析した。顧客が感じた不満に対し、その後の対処の有無に関わらず「反応がない」という結果が最も多く見られたと指摘している。韓国人接客者は「目的達成指向性」が強いため「取り返しがつく」場合は対処はするものの謝罪はせず、「取り返しがつかない」場合には対処も謝罪もしない。いずれも韓国人には当たり前すぎて意識されにくい事象を取り上げており、評価を探る試みでもあり、言語理論に埋没されない形で韓日の謝罪文化の違いを掘り下げた好著である。筆者としては、なぜそのような言語行動が行われるのかという解釈の問題を含め、韓日の言語文化意識についての研究に発展してほしい、という要望がある。

3.2 初対面の接触場面における発話行為の戦略

前節で述べてきたように、ポライトネス理論を理論的背景とし、言語的ストラテジーを捉えた研究が多い。ポライトネス理論に依拠したため、会話参加者間の社会的距離(Distance)を一定に保つ「初対面談話」が主流であったが、その後「友人場面」に広がったことが確認される。いくつか紹介しよう。まず、初対面でありながら対等な関係の相手に対する容易な申し出の場面で、韓日の働きかけ方について談話完成テスト(DCT)資料を用いて考察した峯崎知子「申し出の場面での働きかけ方における日韓対照研究 - 対等で初対面の相手に対する容易な場面を中心に -」(『日語日文学研究』93(1)、2015)がある。日本語では、韓国語に比べて丁寧に申し出を行う傾向が見られ、特に《対人配慮》を使って相手に配慮しながら申し出る傾向があると報告している。이은미 「대학생 친구 간 대화와 첫 만남 대화에 나타나는 『나

んか』의 사용양상」【李恩美、大学生友人同士の会話と初対面の会話に現れる「なんか」の使用様相】（『日本研究』64、韓国外語大学校、2015）は、日本人の女子大学生の友人同士の会話と初対面の会話に現れる「なんか」が会話相手への配慮を示しながら円滑なコミュニケーションを維持していくための一つの言語ストラテジーであり、「なんか」の使用は親疎の要因とは関係のないことを論じている。

理論的背景をポライトネス理論に求めている初期の研究は、多くの研究が会話参加者間の「社会的距離」を一定に保つことを至上の課題とし、「初対面2者間会話」かまたは「友人同士の2者間会話」資料を収集し、考察している。しかし、一個人の中でも、会話参加者間の「力関係(Power)」や「社会的距離(Distance)」、「ある行為が相手にかける負荷度(Ranking of Imposition)」に応じて、ことばの使用にさまざまなバリエーションを持つ。筆者としては、一人の話者がいくつかの場面でどのようにことばを使い分けるのか、といったバリエーション理論の観点からの議論がほしかった。ここでは、数は少ないが、バリエーション理論の視点から個人の持つフォーマルなスタイルとカジュアルなスタイルを比較し、話し手の意図的な操作による表現形式の使い分けを分析した研究を紹介する。李吉鎔「日本語学習者におけるダロウとデショウの意味機能認識と使用実態」（『日語日文学』66、大韓日語日文学会、2015）は、韓国人日本語学習者4名の日本語によるフォーマルな談話資料（初対面など疎の関係の日本人との会話）とカジュアルな談話資料（当時最も親しくしていた日本人親友との会話）を縦断的に収集し分析したものである（全22談話・計868分）。なお、この研究の基本的な発想は、ことばの使い分けは場面ごとに行われるといったドメイン型である。残念ながら、さまざまなことばの使い分けは、ひとつの場面のなかでも秩序あるものとして行われる可能性があり、ことばの使い分けは個々人の社会的実践の反映という視点を検証に盛り込んだ研究にはつながらなかった。李吉鎔氏の研究は重要な視点を提供したが、今後のさらなる活性化に期待したい。

また、発話行為の構造的な側面や話者交替などの会話分析的手法も少ないが、そのなかで、貴重な報告があった。張良光「初対面雑談における連鎖構造分析の一考察 - 質問からはじまる連鎖組織を中心に -」（『日本文化研究』55、東アジア日本学会、2015）は、初対面会話における雑談の構造化について、話題開始部の第一発話を分析し、初対面会話では共有する情報がないため、質問からはじまる連鎖組織が多く表れる、ということを見出している。一方、話者交替について発話の種類、出現割合、話者交替、発話権取得という観点から分析した渡邊有紀恵「日本語方言談話における話者交替」（『日語日文学研究』94(1)、2015）は、実質的発話とあいづち発話の割合に地域差が見られることなど、人間がことばを使用する行為のあり方を探ろうとする試みである。

最後に、これまでは表出された発話から規則性(認識)を探し出そうとした観点のものが主流であったが、정영미「부담도가 높은 청유행동에 관한 한일대조연구 - 청유를 행하기 전의 전략에 대하여 -」【鄭榮美、負担度の高い誘い行動に関する韓日対照研究 - 誘い行動の前の戦略について -】（『人文科学研究論叢』37(4)、明知大学校、2016）は、発話行為の遂行以前の戦略について論じた好著である。韓日の男子大学生が負担に思う事柄を友人に誘う会話を収録し、誘い行動がどのように展開していくかを分析した。日本語では韓国語に比べて相手を誘う発話に到達するまでの時間が相対的に長かった。そして誘い手は被誘い手の反応を探るため、誘いの意図を伝える前から多用な戦略を用いていた。鄭榮美氏の一連の論考は、言語的ストラテジーの実態分析から一歩進んだものとして価値があるが、さらに発話行為の遂行以前の戦略については、発話の開始される前の計画段階から表出までのプロセスを、言語管理理論の事前訂正(pre-correction)や中途訂正(in-correction)の概念(Neustupný 1978)を導入し、また丹念なフォローアップ・インタビュー(follow-up interview)を通してその究明を試みることができよう。

なお、この視点は、第2言語習得におけるコミュニケーション・ストラテジー研究の回避ストラテジー(avoidance strategies)に関する事象とつながりを持つ。トピック回避(topic avoidance)などは発話前の段階での計画なので、研究者に認識されにくく、また学習者の心理過程を発話の表現形式から見出すのは至極困難であるなどといった理由により光が当てられることはなかった。残念ながら今期も学習者言語の本質の問題として取り上げた論考は見られなかったが、学習者の負担度も高く、緊急を要するといった社会的な要求がある。回避ストラテジーの使用された後のトピックの修復有無やそのプロセスなども、興味深いテーマである。今後の基礎的な研究が必要である。

次節では、第2言語習得研究分野を展望する。

3.3 第2言語習得

第2言語習得研究は、学習者言語(中間言語)における規則の発見を基本的な目標とする。尹祥漢・崔延朱「授受動詞『(て)あげる・(て)くれる・(て)もらう』の習得に関する縦断的研究 - 初・中級日本語学習者の習得過程に着目して -」(『日本語文学』64、韓国日本語学会、2015)は、日本語学習者の主動詞としての授受動詞の習得順序は「もらう」>「あげる」>「くれる」になるが、学習者ごとの一定のパターンは見られないという。李吉鎔「韓国人学習者の日本語文末表現の習得に関する一考察」(『日本学報』106、韓国日本学会、2016)は、日本語運用能力の異なる3つのグループの韓国人日本語学習者の会話を収集し、文末表現の各項目を分析した。そのうちノダ形式は活用の簡単な名詞述語文よりも、相対的に活用の難しい動詞述語文と親和性がある。ノダ形式は共有の情報や日本語らしさの追求といった順機能や誤解や摩擦の原因になるといった逆機能を併せ持つものであるが、一部に不適切な使用も見られるという。以上は文法能力の習得を捉えたものであるが、李吉鎔「日本語スタイル切換え能力の習得と維持のメカニズム - 帰国10年後の元学習者の推量・確認要求表現の場合 -」(『日本語教育研究』31、2015)は、スタイル切換えという社会言語能力を捉えた研究である。社会言語能力についてはカバーする範囲が広いうえに研究がむずかしく、まだまだ不足する。日本語学習者が日本語を使用して対人ネットワークを構築し、維持するためには非常に重要な能力であり、研究が急がれるところである。

学習者言語については、「中間言語(interlanguage)」の名が示すように、目標言語へ向かう途中にあるもので、目標言語とは異なる体系を持つものと認識されてきた。そして日本語教育の現場では日本語の不適切な使用は矯正すべき事象として捉えられてきた。日本語学習者が日本語での会話を試みる限り、限られた日本語能力による不適切なことばの使用も多々あるが、それは言語習得過程に必然的に現れる過渡的現象であり、発達的な誤り(developmental error)と認められよう。William Labovが、デタラメなことばと思われていた貧民街の黒人子どもたちが話すことば(the dialect spoken by black children in Harlem)も体系性を備えていることを旨とする「The Logic of Nonstandard English(1969)」を発表し世の中をあっと言わせたように(Labov, W. 1997参照)、筆者には、学習者言語も目標言語とは異なるところもあるが、立派に体系を構築しているという、「The Logic of Interlanguage」が集大成できれば、という思いがある。梁乃允・李吉鎔「韓国語・英語・中国語母語話者の日本語文末表現の習得様相 - ノダ形式と終助詞を中心に -」(『日本研究』70、韓国外国語大学校、2016)にその可能性を見る。

第2言語習得研究は、当初の習得研究から維持へ、そして摩滅についての研究へと発展しつつある。まず、李吉鎔「日本語学習者の推量・確認要求表現の使用条件」(『日本語学研究』44、2015)は、日本語のコミュニケーション能力の習得と維持を捉えた研究である。元学習者の日本留学時(習得期)と、帰国後約10年が経過した時点の維持期に、計12回の縦断的な談話収録調査を行い、推量表現と確認要求表現

を分析した。維持期の学習者の場合は、両表現を話し手自身の意見や情報のみで操作し、話し相手の意見・情報に対する見積もりを切り捨てるといった「使用条件の簡略化」と「運用上の負担軽減」という要因により使い分けていた。学習者が独自の使用規則を構築していくことと関連させて論じたものである。황영희「한국인일본어학습자의 제2언어보존 메커니즘 - 일본어 접촉 유형에 따른 변이형 -」【黃永熙、韓國人日本語学習者の第2言語の保存メカニズム - 日本語接触類型による変異形 -】(『日本語教育研究』31、2015)は日本語能力の維持(保存)に関するもの。中国東北部地域の朝鮮族の老年層話者が70余年間保存している日本語(旧植民地日本語)の変異形(存在動詞、可能動詞、アスペクト形式、否定辞、条件形式、文末形式の標準語形と非標準語形、方言形)の使用実態を分析し、旧植民地日本語は長期間の潜伏期を経ても安定して使用され、さらに言語習得環境との相関関係が見出せるという。同じく、황영희「중간언어화용론의 관점에서 본 제2언어습득 이후의 일본어 종조사의 특징 - 중국 조선족 식민지일본어와의 비교 -」【黃永熙、中間言語語用論の観点からみた第2言語習得以降の日本語終助詞の特徴 - 中国朝鮮族の旧植民地日本語との比較 -】(『日本研究』42、中央大学校、2016)も、言語は社会の中で捉えられるという視点を提供するものである。一方、金昂京「帰国児童における第二言語としての日本語の摩滅 - 音韻・音声の変化に注目して -」(『日本研究』42、中央大学校、2016)は、日本で日本語を身につけたあと、韓国へ帰国した韓国人児童3人の使用する日本語において、韓国語では弁別要素でない特殊拍などの音声の面でも単純化という摩滅が起こっていることを明らかにした。学習者が日本で日本語を習得したあと、自国にもどってその日本語をどのように維持し、失っていくのか、その全貌を明らかにすることは日本語教育政策にとってもきわめて重要なはずである。

こうして学習者言語についての研究が進むなか、第2言語から第1言語への転移現象(いわゆる逆転移、Backward Transfer)に注目した研究が行われた。尹テ레サ「第二言語から第一言語への転移現象に関する意識調査 - 韓国人日本語学習者を対象に -」(『日語日文学研究』94(1)、2015)は、逆転移現象の実態と評価について韓国人日本語学習者71名(JSL41名、JFL30名)を対象にアンケート調査を行い調べた。学習環境の違いに関わらず、半分以上が日本語学習は韓国語に良い影響を与えたと答えている。Multi-competence(多重言語能力)と捉えているという視点には注目すべきものがある。一般に学習者言語の特性として、目標言語に向かって常に発達していく中で母語の転移などから影響を受けやすいという「浸透性(permeability)」、中間言語の規則を常に修正拡大していく「可変性(variability)」、また学習者が既習の規則に基づいて言語を使用する「体系性(systematicity)」が挙げられるが、逆転移現象はどのように位置づけられるか、今後の実態調査が待たれるところである。

4. 研究の広がり(言語接触研究・継承日本語教育研究)

以上、語用論・社会言語学の分野において2015-16年度に韓国で発表された主な研究成果を見てきた。ここでは社会言語学がカバーする範囲内に収まる言語と社会の関係を探る論考をいくつか紹介する。社会言語学は、社会とことばの相関関係に焦点を当てた学際的な研究分野である。ここで社会言語学の研究分野をHymesに倣って整理しておく(황지륜(黃迪倫2010)を参照)。Hymes(1974)は、社会言語学の3大領域を次のように分類している。

- (1) social as well as linguistic phenomena(社会現象は言語現象)
- (2) socially realistic linguistics(社会的に実写する言語学)
- (3) socially constituted linguistics(社会的に構成された言語学)

(1)の領域はことばを通して社会を知ろうとするスタンスをとり、「言語社会学(sociology of language)」とでもいえよう。Joshua Fishman, Uriel Weinreichなどによって主導され、言語政策、2言語併用、言語交替、言語習得などを主なテーマとする言語接触学派(the language contact stand)である。

(2)はPerer TrudgillやWilliam Labovに代表される領域で、社会言語学こそ言語学であるというスタンスをとる(そういう意味で「純社会言語学(sociolinguistics proper)」とも)。Labov式社会言語学(Labovian type of sociolinguistics)とも言われるこの分野の主な研究テーマは、社会的要因と関わる言語変異(language variation)と変化(change)である。あるコミュニティの言語形式の変化を捉え、その変化がどのようにコミュニティの社会的または文化的事象とダイナミクスに相関しているか、それによってどのように生成されているか、などを追求し、ことばの社会的変異現象を通時的変化(diachronic change)の共時的反映(synchronic reflex)であることを示した。

(3)は「ことばの民族誌(the ethnography of communication)」といわれる領域であり、社会的および文化的状況によるコミュニケーションのさまざまな違いを探る。ことばの民族誌の枠組みでは、「言語」は言語構造よりも言語使用のことであり、また、文化は人々に内在する世界観のような認知的知識ではなく、人々のコミュニケーションの実践によって作り上げるものである。

第3節で見てきたように、ハイムズの分類に従えば、今期の韓国では(3)の領域の研究が盛んに行われたことがわかる。言語を一つの社会的ならびに文化的な現象として取り扱っている。一方で欧米の社会言語学では、言語体系だけではなく、言語体系の外側にある社会に注目するものが多い。ここでは(1)や(2)の領域に属する研究をいくつか紹介する。「言語接触・接触言語・役割語」「継承日本語・日本語教育」の2つの研究テーマに分けて簡略に整理する。

(1)まず、言語接触・接触言語研究について。박강훈「한일 양 언어의 언어접촉에 의한 언어변화 - 문법화 이론을 중심으로 -」【朴江訓、韓日両言語の言語接触による言語変化 - 文法化理論を中心に -】(『日本文化研究』58、東アジア日本学会、2016)は、否定極性表現・副助詞(シカ・ホカ)の事例を用いて韓日両言語の言語接触による文法構造の変化の様相を明らかにしたものである。韓日両言語の内的変化と外的変化は、規則的で体系的な様相を見せることを文法化理論から論じている。韓日の対照言語では数少ない、理論を確立しようとする意欲的な試みである。梁熙貞「日韓バイリンガルにおける韓国語・朝鮮語使用に関わる社会環境的な要因 - 在日コリアン・オールドカマーを中心に -」(『日語日文学研究』96(1)、2016)は、在日コリアンの言語使用を彼らを取り巻く社会環境と関連させて論じたもの。日本での韓流ブームや韓国語学習者の増加などの社会的な要因により、在日コリアン・オールドカマーにおいて韓国・朝鮮語の使用が促進されていると主張する。この点は近日の日本が抱えている多文化共生社会への課題に示唆するところがあるが、韓流ブームはいわゆる日本の右傾化の時期と重なっているため、長期的な視野での検証が要る。李吉鎔「南米の日系移民社会における言語能力と使用の関係性」(『日本研究』38、中央大学校、2015)は南アメリカの4ヶ所の日系移民コミュニティにおける言語維持と言語交替過程を調査し、日本語の維持およびポルトガル語への交替についてのパターンを確認した。言語形成期前後に移民させられた、「子ども移民」と言われる1.5世が、言語維持と言語交替に重要な役割を果たすという、注目すべき知見を提供している。韓国での日本語学(社会言語学)研究とは距離があるものの、研究方法論は参考になる。

一方、21世紀の知識情報化社会の高度化に伴い、SNSなどの新しいメディアの発達により携帯メールやSMSでのコードスイッチングなど、新しい形の接触言語が現れている。이길용·이이슬「한글표기 일본어 및 가나표기 한국어의 접촉언어적 특징」【李吉鎔·李イスル、ハングル日本語とカタカナ韓国語の接触言語的特徴】（『日本研究』64、韓国外国語大学校、2015）は、韓国と日本のインターネットコミュニティーサイトにおける韓国語と日本語の接触言語の構造的特徴を分析したもの。ハングル日本語の場合は、「니혼고 어렵데스(日本語難しです)」のように、「데스(デス)」と前接項目の韓国語が統合的關係(syntagmatic relation)を成す融合型構造が見られる。一方で、カタカナ韓国語の構造的特徴としては、「今度は絶対に間違いないニダ!」の例のように、ニダと前接項目が分離型構造を成している。こうした特徴を日本語や韓国語の学習経験の有無と関連付けて解釈している。これらを新しいメディアの登場により言語使用の変化が促された事例として捉えた이이슬·이길용「일본어역할어와 한국어역할어의 이미 지」【李イスル·李吉鎔、日本語役割語と韓国語役割語のイメージ】（『比較日文学』33、漢陽大学校、2015）では、上の接触言語に付与されたイメージを考察した。日本語役割語(데스(デス)など)は日本語学習経験者による言葉遊びの使用が多いが、韓国語役割語(니다など)に伴うイメージは、近現代の韓国におよび在日韓国人を表象するもので、否定的であることがわかった。これらは書きことば性(literacy)の強かった新聞やテキストとは異なり、話しことば性(orality)の強い資料の特性に着眼した研究である。

さらに役割語研究については、田村友里絵「日本漫画作品の韓国語対訳本に見られる役割語翻訳の実態」（『日本語学研究』43、2015）と郭銀心「韓国人日本語学習者の役割語に対する認識と使用に関する調査－男性語と女性語を中心に－」（『日本言語文化』34、2016）があった。日本の漫画における役割語が韓国語にどのように訳されるかを調べた田村友里絵氏によれば、日本語の役割語は韓国語の翻訳には反映されない傾向にあるという。郭銀心氏も韓国人日本語学習者を対象に、女性語と男性語の役割語についての知識を調査し、学習者の約半分(46.9%)が正確な知識を持っていることを報告している。この分野もさらに基礎的な研究が必要である。

(2)継承日本語・日本語教育研究について。川口慶子「韓日国際結婚家庭の子女を取り巻く継承日本語教育の現況と課題」（『日語日文学研究』97(1)、2016）は、韓日国際結婚家庭の子女への母語・継承日本語教育の実態を調査すべく、「公立小学校、多文化家族支援センター、地域のコミュニティーやNPOによる教室」などの学校や地域で教育を担当する実施主体の講師16名にインタビューを実施した。課題は多いものの、継承日本語教育がようやく家庭外でも実践レベルで展開し始めていることを確認した。尾関史・青木優子「韓日国際結婚家庭の日本語継承を支えるもの－母と娘の語りから見る継承日本語教育－」（『日語日文学研究』93(1)、2015）は、韓国に暮らす韓日国際結婚家庭の母娘にインタビューを行い、母と娘の双方が日本語をコミュニケーションの媒介として捉え、日常生活の中で日本語を意識的に使用すること、それが日本語継承への意味づけを肯定的なものとし、積極的な日本語継承へとつながることを明らかにした。いずれも質的な研究法によるもので、多文化社会における研究課題として十分に共感できるものがある。在日韓国人、また在韓外国人一般のケースを考慮にいれての議論に発展してほしい。

これらの研究は、日本語教育研究にもつながる。宋美娟「ある韓国人留学生の語りから考える留学生支援の在り方－『待遇コミュニケーション観』の形成と変容を中心に－」（『日語日文学研究』93(1)、2015）は、留学生の留学生活経験と意識に基づいて日本語教育の立場から留学生に対する支援を考えるための基礎的な事例研究。韓国からの女子留学生一人を調査対象者とし、1年間に5回のインタビュー調査を実施した。クラスやサークル、校外活動などの多様な活動に参加したこと、その中で多様な人とネットワークを形成したことによって、留学に満足を感じるようになったことを明らかにした。留学生の

日本での経験について詳しく聞くことで、その人の持っている日本語とそれを取り巻く環境に関する意識を知ろうとする方法はユニークであり、興味深い。現代の科学的な考え方や学問的成果において、主観的な体験の地位は極めて低い。しかし、オーラル・ヒストリー研究は仮説設定のための基礎研究として重要な役割を果たす。日本語教育研究にも新しい視点を導入することになろう。

最後に、本稿は主流分野の流れをつかむことを目標にしてきたため、ふるいにかからなかった玉稿も多い。ここに主な研究の題目のみを挙げておくことを許されたい。

- ・白同善「放送を通じてみた日本人の敬語運用の実態に関する研究 - ビジネスドラマ『半沢直樹』の台詞分析をもとに -」(『日語日文学研究』 95(1)、2015)
- ・崔善喜・姜錫祐「授受動詞を用いた命令文とボライトネス」(『日本語学研究』 44、2015)
- ・金修卿「『マイナス待遇表現のプラス待遇化』 - 発話機能と人間関係の相関性を中心に -」(『日本言語文化』 33、2015)
- ・琴鍾愛「談話標識の出現傾向からみた韓国人日本語学習者の談話展開の方法 - 日本人母語話者との比較を中心に -」(『日本文化学報』 64、韓国日本文化学会、2015)
- ・李舜炯「対人関係に応じた『共話的反応の型』の使い分け」(『日語日文学研究』 95(1)、2015)
- ・김윤희「한일 외국어학습자의 언어행동에 대한 일고찰 - 언어행동규범의 재편성을 중심으로 -」【金允喜、韓日の外国語学習者の言語行動についての一考察 - 言語行動規範の再編成を中心に -】(『日本研究』 39、中央大学校、2015)
- ・飯干和也「韓国人日本語学習者の意見文に現れた『譲歩』の考察」(『日本言語文化』 33、2015)
- ・양민호「한일 언어경관 연구의 현재와 향후 모델에 대한 연구」【梁敏鎬、韓日における言語景觀研究の現在と向後のモデルに関する研究】(『日本文学』 40、東国大学校、2015)

5. おわりに

2003-04年、筆者が博士論文を執筆していた頃は、スピーチレベル(待遇レベル)シフト研究が、丁寧体がベースの談話において非丁寧体へのダウン・シフトを中心に、「規範からの逸脱」という観点から活発に行われており、さらには友人同士の会話でのアップ・シフトを捉えようとする動きもあった。この手の研究はもう見ない。ひとつの研究の風が止まった。

今は第3節で紹介した研究が盛んに行われ、多くの研究者の努力によって韓国人と日本人の言語行動の具体的な姿が明らかになりつつある。しかし「実証的な言語行動の韓日対照研究は量的にも質的にもまだ不足する」という生越直樹(2012)の指摘はまだ有効であるように思われる。そして特定の言語行動の観察や記述を目的とするものが多い一方、なぜそのような姿をしているのかという要因分析型研究が少ないのは残念である。今後韓国においてどのような研究ブームが巻き起こるか、想像すらできないが、§3.1の言語的行動がそれぞれの言語社会においてどのような姿をしているのかという実態記述を中心とした研究から見えてくる研究課題を3点ほど挙げておく。つまり、(1)フェイス・リスクの見積もりが大きいなどさまざまな理由により、話し手が発話行為自体をあきらめること(すなわち行為をしないこと)、(2)発話行為が好ましくない結果に終わり、一方または双方のメンツがつぶれた場合の責任の所在、(3)ヘッジなどの緩和材の全体像、である。

まず、ボライトネス理論においても、フェイス・リスクの見積もりが大きければ「行為回避」が選ばれ

るとあるが、この視点の研究は意外と少ない。韓国人と日本人のコミュニケーションにおいて「行為回避」を選択する度合いも異なることが十分に予想されるが、これまでの調査では依頼、断り、謝罪などにおける具体的な言語表現を義務的な行為として要求してきたため、必ずしも実態を反映していない言語行動研究が行われてきた感がある。次に、依頼、断り、謝罪などの発話内行為において、話し手には発話効果行為に対する信頼が前提にある。しかし話し手の信頼がいつでも妥当なものとは限らず、当然当て外れの場合もあるはずである。メッセージに託された話し手の発話意図(encoding)とメッセージに対する相手の解釈(decoding)の一致や不一致、メッセージに対する相互評価に関する研究といった新しい視点が求められよう。その一つとして、コミュニケーションが破綻した際の責任の在り処に関する研究があろう。こうした発話行為の多様な側面を捉えるには、実態記述型研究から要因探求型あるいは仮説検証型研究へと展開されなければならない。

そして「ヘッジなどの緩和材」については、メタ言語行動表現やディスコース・マーカー、中途終了型発話や疑問形の使用、声の高さなどの音調、笑いや視線などの非言語行動、などの要素が考えられてきたが、その全体像および緩和材としての役割の大きさなどについての論考は管見の限りにおいて見当たらない。さらに、話し手が相手に提示する配慮の量の大きさが韓日で同じであるかどうかとも問題になる。現在のほとんどの研究は、配慮の量の大きさが同じであるという前提に立ち、配慮の方法が異なるというスタンスをとる。しかし、韓日で配慮の量の大きさが同じであるという仮定はどのようにして見出されたのか、この点についての検証も今後の課題となる。

本稿の執筆に際し、紙幅の都合で大まかな紹介にとどまったことは悔いが残る。何よりも筆者の力量の不足により不十分な考察になってはいないか甚だ不安であるが、その節はご容赦願いたい。しかし韓国在住の韓国人研究者が、韓国の学界で研究をする意義や価値について顧みるチャンスを得た。そして韓国において日本語教育に従事する者の一人として、韓国人学習者が思いやりや気配り、気づかいなどの文化が発達している、日本人の会話の型を理解するようになるには、どのような教育が必要か、その可能性を探ることを課題と考えていることを記しておく。

なお、冒頭のあいさつ文において、現在のGoogle翻訳では「사장님」は「ボス」と翻訳される。「사장」にすると「社長」になるのであるが、すぐに改善されると予想される。しかし具体的なコンテキストに依存する語用論的意味の翻訳は到底太刀打ちできない。また、冒頭で挙げた5つの意味以外にも、コノテーション(connotation)の典型的な例であるが、社会文化的意味合いの強い発話の場合はどうか。試しに「저 인간은 술 먹으면 개야 개。」を入力してみると、「あの人間はお酒食べると犬です犬。」のように、現時点でも従来通りに各単語を個別に翻訳し繋げるだけのものとなる。少しはましな人間にならないと、という自戒の念を込めての例文であるが、お酒に酔って悪さをする人のことを「개(犬)」にたとえる韓国の文化に馴染みのない日本人の読者には意味が通らないだろう。機械学習(ディープラーニング)が応用され人工知能翻訳が高度化したといわれるGoogle翻訳であるが、語彙の意味や文法的意味の翻訳は申し分ないものの、ことばの背後から顔をのぞかせる話し手の気持ちの理解が難しい、9歳の子どものレベルといったところか。人工知能翻訳が高度化しつつある今でこそ、第2言語学習者が目標言語の語用論的意味や社会文化的意味を習得すること、そしてそれについての研究は益々重要になってくると思われる。

【参考文献】

- 李吉鎔(2011) 「異文化間コミュニケーション研究のデザイン」 『日本研究』 30 中央大学校日本研究所 pp.27-46
- 黃迪倫(2010) 「사회언어학의 기원과 성립」 『사회언어학』 18-2 한국사회언어학회 pp.1-27
- 生越直樹(2012) 「言語行動の日韓対照研究—その成果と問題点」 野間秀樹編 『韓国語教育論講座(第2巻)』 くろしお出版.(「언어 행동에 관한 한일 대조 연구—그 성과와 문제점」 오고시 나오카・이현희(2015) 『일본의 한국어학』 に再掲)
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.(田中典子・斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子共訳(2007) 『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』 研究社)
- Canale, M. (1983). From communicative competence to communicative language pedagogy. In J. Richards and Schmidt (Eds.), *Language and communication*. London: Longman. pp.2-27
- Canale, M. & Swain, M. (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics* 1, pp.1-47
- Hymes, D.H. (1972). On Communicative Competence. In: Pride, J. B., & Holmes, J. (eds) *Sociolinguistics. Selected Readings*. Baltimore, USA: Penguin Education, Penguin Books Ltd. pp.269-293
- _____ (1974). *Foundations in sociolinguistics: An ethnographic approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Labov, W. (1997). How I got into linguistics, and what I got out of it. In Labov's Homepage in <http://www.ling.upenn.edu/~wlabov/>.
- Neustupný, J.V. (1978). *Post-Structural Approaches to Languages: Language Theory in a Japanese Context*. Tokyo: University of Tokyo Press.

〈요지〉

화용론·사회언어학 연구의 현황과 전망

본고에서는 화용론·사회언어학 분야에서 2015-16년도에 한국에서 발표된 122개의 연구 논문을 대상으로 전망한다. 대상 논문의 키워드를 분류해보면 〈한국어와 일본어의 대조담화분석〉이라는 한국에서의 화용론 연구·사회언어학 연구의 특징이 부각되고 (1)한일 간 커뮤니케이션의 기능 (2)첫대면 접촉장면에서의 발화행위의 전략, (3)제2언어습득 분야의 키워드가 많은 것을 알 수 있다.

한일 간 대조담화분석 연구분야에서는 의사소통상의 오해나 마찰의 해소에 도움이 되고자 하는 사회적 유용성을 연구의 의의로 언급한 논문이 많다. '어떤 내용을, 어떻게 말하는가'에 착안한 실태기술형 대조연구가 진행되어 왔는데 공손이론을 이론적 배경으로 하여 언어적 전략을 파악한 연구는 많은 반면, 한 명의 화자가 여러 상황에서 어떤 변종을 사용하는가 하는 변이이론의 관점에서 논의한 것은 적다. 한편 한국인에게 너무나 당연해 의식되지 않는 실태를 거론하며 한일 간 사문화의 차이를 파고든 것으로 한국에 거주하는 일본인 연구자에 의한 문화론적 연구는 언어이론에 매몰되지 않은 것으로 신선함이 돋보인다.

제2언어습득 연구는 학습자언어에 있어서의 규칙 발견을 기본적인 목표로 하여 습득에서 유지, 그리고 마멸에 대한 연구로 발전하고 있다. 그러나 사회언어능력의 습득연구는 아직 부족하다. 일본어 학습자가 일본어를 사용하여 대인관계 네트워크를 구축하고 유지하는 데 중요한 능력이므로 연구가 시급하다.

많은 연구자의 노력으로 한국인과 일본인의 언어행동의 구체적인 모습이 밝혀지고 있지만 '실증적 언어행동의 한일대조 연구는 질적으로도 양적으로도 아직 부족하다'는 원로 연구자의 지적은 여전히 유효한 것으로 보인다. 그리고 특정 언어행동의 관찰과 묘사를 목적으로 하는 것이 많은 반면, 왜 그런 모습을 하고 있는가 하는 요인분석형 연구가 적다는 것이 과제로 남는다.

논문분야 : 화용론, 사회언어학

키워드 : 한일대조연구, 접촉장면, 발화행위, 담화분석, 제2언어습득, 기능, 전략

■ 이길용 (李吉鎔)

중앙대학교 교수

ih_kilyong@cau.ac.kr